

多様な人材が輝く、力強い北海道農業

わが国最大の「食料供給地域」である北海道農業のさらなる発展をめざす北海道は、2021年3月に「第6期農業・農村振興推進計画」を策定した。「持続可能で生産性の高い農業・農村」や「国内外の需要を取り込む農業・農村」それに「多様な人材が活躍する農業・農村」など、そのめざす姿を紹介する。

自給率200%の「食料供給地域」

北海道農業の歩みは、1869(明治2)年の開拓使の設置に始まり、152年が経過しています。この間、冬の期間が長く積雪、寒冷などの厳しい気候のもと、欧米の近代的な農業技術の導入や火山灰、泥炭などの特殊土壌の改良などを進め、今日の北海道は、生産性の高い農業を展開するわが国最大の食料供給地域となっています。

北海道の総土地面積は、東北6県に新潟県を加えた面積より大きく地形的にも大きな広がりを持ち、地域によって気候や土壌条件などが異なることから、それぞれの地域ごとに特色のある農業が展開されています。

函館市などの道南地域では、温暖な気候を活

かして、野菜や米を中心に、馬鈴しょ、豆類などの畑作物を加えた集約的な農業が営まれています。

旭川市、岩見沢市などの道央地域では、豊富な水資源と比較的温暖な夏季の気候を活かして、米や野菜などを主体とした農業が展開されています。

また、帯広市、北見市、釧路市などの道東地域や、稚内市などの道北地域では、恵まれた土地資源を活かし、麦類や豆類、馬鈴しょ、てん菜(ビート)などを輪作する大規模な畑作、それにEU諸国の水準に匹敵する大規模で機械化された酪農や肉牛生産が展開されています。

北海道の1経営体当たりの経営耕地面積は30・2haと都府県平均の13・7倍です。乳用牛の飼養頭数は146・3頭と都府県平均の2・4

倍、肉用牛飼養頭数は167・9頭と都府県平均の3・6倍となっています。

個人経営体では主業経営体(いわゆる専業)の割合が71・7%と都府県平均の20・8%を大きく上回っています。また、基幹的農業従事者に占める65歳未満の割合も59・5%と、都府県平均の28・8%を上回っており、恵まれた土地資源を活かし、大規模で専業的な経営体を主体とする農業が展開されているといえます。

北海道の農産物の生産量は、本道のみで生産されている、てん菜をはじめ、小麦、大豆、小豆、いんげん、馬鈴しょ、たまねぎ、かぼちゃ、スイートコーン、にんじんなど、さまざまな品目で全国第1位となっています。畜産物についても、生乳生産量が全国の5割以上を占めているほか、牛肉、軽種馬なども全国第1位となっています。



北海道 農政部長

宮田 大 MIYATA Dai

みやた だい
1963年北海道生まれ、北海道大学獣医学部卒業。90年北海道庁入庁。BSEなどの家畜伝染病対策、「北海道食の安全・安心基本計画」の策定、「主要農作物種子条例」の制定、農畜産物の輸出促進など、農畜産物の生産振興から食品政策まで農政に関する幅広い分野に従事する。生産振興局長、農政部長、食の安全推進監を経て2021年4月より現職。

ます。

このように、道内の各地域において、それぞれの気候や土壌条件を活かし、大規模で専門的な経営により生産性の高い農業を展開することで、本道の供給熱量（カロリー）ベースの食料自給率は、2019年度で216%と、都道府県別で全国第1位となっています。

高齢化と過疎化の進む農業・農村

国内外の社会経済情勢の変化に伴い北海道を含むわが国の農業・農村を取り巻く情勢は大きく変化しています。

まず世界に目を向けると、日本食への関心の高まりや食市場の拡大により、農林水産物や食品の輸出額が増加しています。一方で、TPP11協定や日EU・EPA、日米貿易協定の発効など、グローバル化の進展により、農産物分野での一層の競争力強化が求められています。

また、「持続的な開発目標（SDGs）」への関心が世界的に高まり、カーボンニュートラルなどSDGsの推進に向けた取り組みが国内外で着実に拡大しています。

国内においては、人口減少や高齢化により食市場の規模が縮小するなか、単身世帯や共働き世帯の増加など、社会構造やライフスタイルの変化に伴って、消費者ニーズの多様化や食の外部化など食市場の変化が進んでいます。また、ロボットやAI、IoTなどの活用による産業や社会の変革など、デジタル化が進展しています。

また、新型コロナウイルス感染症の拡大により、農産物の輸入が一時的に停滞するなど、食

料の安定供給に影響を及ぼすリスクが顕在化したことから、国内の農業生産への期待がより一層高まっているとともに、リモートワークなどの普及を通じて、暮らしや働く場所としての農業・農村の持つ価値や魅力が再認識されています。

北海道の人口は、1997年をピークに減少していますが、全国平均を上回るスピードで減少し続けており、事態は深刻です。少子高齢化に加え、道内の中核都市や道外の大都市などへの人口流出によって、多くの地域で過疎化が進行しています。労働力の減少はもとより、地域産業を支える担い手の不足や、地域におけるコミュニティの活力低下など、地域経済や道民生活にさまざまな悪影響を与えています。

さらに、近年、地球温暖化による気候変動などに起因する大規模自然災害のリスクが全国的にも高まっていますが、北海道も自然災害に見舞われています。2016年には相次いで上陸・接近した台風による大雨、18年には北海道胆振東部地震などによって、北海道の農業生産基盤に大きな被害が生じています。

北海道農業のめざす姿と将来像

こうした農業・農村を取り巻く環境の変化を踏まえ、北海道では、「北海道農業・農村振興条例」（1997年公布）に基づき、農業・農村の振興に関する施策を総合的かつ計画的に推進するため、「北海道農業・農村振興推進計画」を策定しています。

計画は5年ごとに更新しており、2021年

3月に、25年度までの5年間を計画期間とする「第6期北海道農業・農村振興推進計画」を策定しました。本計画は、北海道の農業・農村が持続的に発展していくための将来像を「めざす姿」として示し、その実現に向けた施策を市町村や農業者、消費者、関係団体などと連携して総合的に推進していくための中長期的な指針としての役割を果たすものです。

今回の計画では、おおむね10年後（2030年ごろ）の農業・農村が、その価値や魅力を磨き、強みを活かすことで、求められる役割や期待に的確に応えて発展するための「めざす姿」を「多様な担い手と人材が輝く力強い農業・農村」として掲げています。

この「多様な担い手と人材」とは、近年、地域農業を支える雇用人材の役割や期待がこれまで以上に高まっていることを踏まえ、経営者や役員、家族従事者、雇用就農者など「多様な担い手」に、パートなどの短期雇用や農福連携、外国人材などを加えた「多様な人材」として計画に位置づけて施策を推進するものです。

また、「めざす姿」の実現には、北海道民のみならずの理解に支えられながら、農業生産基盤や安定生産体制の整備、ブランド力の強化などを着実に推進して生産力と競争力を高め、持続可能で生産性が高い農業を、国内外の需要を取り込みながら展開することが必要です。

特に、農村人口の減少や高齢化の進行により、生産基盤の脆弱化や地域コミュニティの活力低下が懸念されていることから、幅広い人材の確保・定着に力を入れ、これらの多様な人材が活

躍できる農業・農村を築き上げなければならぬと考えています。

このことから「めざす姿」を形づくる四つの将来像(図1)のとおり設定するとともに、これらの将来像ごとに今後進めていく施策の推進方針と展開方向を整理しています。

「めざす姿」の実現に向けた施策

農業関係者をはじめ多くの道民のみなさんと「めざす姿」を共有し、その実現に向けて、共に実践していくため、本計画では、10年後の姿を表す「総合指標」を示しています。また、農業の潜在力のフル活用、環境と調和した農業の展開、消費者や実需者のニーズを踏まえた生産を基本に、2030年度を目標年度とする道独自の「生産努力目標」を設定しています。これを関係者の共通目標として、その達成に向けて総合的に取り組みを推進することとしています。

「めざす姿」の実現に向けた施策として、四点を掲げています。

第一に、「持続可能で生産性が高い農業・農村の確立」です。頻発する自然災害や病害虫、家畜疾病など農業の持続性を脅かすリスクへの対応を強化し、農地などの農業資源や農業技術を最大限活用して収量の向上を図るなど、持続可能で生産性が高い農業を展開することが求められています。

そのために、基盤整備の推進や優良農地の確保と適切な利用、戦略的な研究開発と普及・定着など生産基盤を強化するとともに、消費者の期待と信頼に応える安全・安心な食料の安定生

産や環境と調和した農業を推進します。

第二に、「国内外の需要を取り込む農業・農村の確立」です。食市場の変化やニーズの多様化などに対応して、国内外の需要を喚起し取り込むことが肝要です。その目標を達成するために、ブランド力の強化や輸出を含む農産物などの販路拡大を図るとともに、地域ぐるみで取り組む6次産業化や関連産業との連携強化など、地域資源を活かした新たな価値の創出を推進します。

第三に、「多様な人材が活躍する農業・農村の確立」です。農業・農村に多様な人材が定着し活躍できることが大切です。そのために、家族経営をはじめとする農業経営体の経営が安定的に発展していくよう支援するとともに、新規就農者や経営感覚を備えた農業経営者、それに地域をリードする女性農業者など農業経営を担う人材の確保や定着、さらには宮農支援組織や農業団体など地域で経営体を支える組織の育成や強化を図ります。

また、他産業と遜色のない誰にとっても働きやすい環境を整え、地域農業を支える多様な人材の受け入れを進めると同時に、所得と雇用機会の確保や生活環境の整備など、快適で安心して暮らせる生活の場づくりを推進します。

第四に、「道民の理解に支えられる農業・農村の確立」です。農業・農村に対する道民の理解なくして北海道農業の発展はあり得ません。そこで、農業・農村を貴重な財産として育み、将来に引き継いでいくため、食育や地産地消など愛食運動の総合的な推進や、多面的機能の発揮など

に向けて地域住民が一体となって進める活力ある農村づくりを進めます。そして、都市・農村交流や農業・農村の魅力の発信など、コンセンサスの形成促進を図ります。

地域の特色ある多様な農業の展開

北海道農業・農村振興推進計画では、本道の農業・農村の「めざす姿」に加え、北海道内の12地域の農業・農村の「めざす姿」を盛り込んでいます(図2)。

広大な北海道においては、地域ごとに特色ある多様な農業が展開されていることを踏まえ、北海道の出先機関(振興局など)が農業者や市町村、農業団体などの地域関係者とともに、おおむね10年後を見据えた地域の農業・農村のめざすべき将来像を描いています。その実現に向けた主な取り組み方向を検討し、それぞれの地域の特色に応じた「めざす姿」を作成しました。

この地域農業・農村の「めざす姿」の実現に向けて、今後さらに地域ぐるみで具体的な取り組みを検討し、推進することとしています。

食料の安定供給はもとより、地域の社会や経済を支える北海道の農業・農村が、将来に向けて持続的に発展し、期待される役割を果たしていくことが大切です。そのためには、道内それぞれの地域が資源や潜在力をフルに発揮し、生産力と競争力を高めていくことが重要です。今後、この計画に基づき、道民の皆さまの理解を得て、農業者や関係機関・団体の皆さまと一体となつて、「めざす姿」の実現に向けて取り組んでまいります。

図1 本道農業・農村の「めざす姿」と4つの将来像

多様な担い手と人材が輝く力強い農業・農村

次世代の農業者をはじめ多様な担い手と人材が活躍し、
北海道の潜在力をフルに発揮することで、
国民全体の食、道民生活や地域経済を支える力強く魅力ある農業・農村を確立

将来像1 持続可能で生産性が高い農業・農村

- 農業生産基盤の強化と農業分野の技術革新が進み、生産性を高めています。
- 消費者の信頼に応える安全・安心で良質な食料を安定的に生産しています。
- 環境と調和した持続可能な農業を展開しています。

将来像2 国内外の需要を取り込む農業・農村

- 道産農産物等が国内外の食市場で消費者や実需者に選ばれています。
- 農村地域の多様な地域資源を活用して、新たな価値が創出されています。

将来像3 多様な人材が活躍する農業・農村

- 家族経営などの農業経営体が、経営体質を強化しながら発展しています。
- 経営感覚に優れた多様な担い手が、夢と誇りを持って農業を営み、地域を力強く支えています。
- 地域の営農支援組織や農業団体が、農業経営体を持続的に支えています。
- 多様な人材が、培った知見や経験、能力を活かし、農業経営体と地域の成長を支えています。
- 農業を中心に雇用や場や快適で安全な定住環境が整備され、人々が安心して暮らしています。

将来像4 道民の理解に支えられる農業・農村

- 消費者は、健康や豊かな暮らしを支える「食」の大切さを理解し、農業者との交流を通じてしっかりと信頼関係を築いています。
- 地域住民は、地域の将来像を共有し、コミュニティ機能を高めながら、一体となって豊かな自然環境や美しい農村景観、特有の伝統文化を継承しています。
- 道民は、農業・農村の役割や重要性を十分理解し、本道農業・農村をかけがえのない財産として、大切に守っています。

図2 地域農業・農村の「めざす姿」

1 空知地域

北海道の米生産をリードする
魅力ある空知水田農業

2 石狩地域

地域を大切に、
地域から期待される都市近郊農業

3 後志地域

多様な人材の活躍による
ブランド力ある後志農業

4 胆振地域

「食の宝庫」を活かして稼ぐ
いぶり農業

5 日高地域

未来へつながら、
魅力あふれる日高農業

6 渡島・檜山地域

小さくとも「キラリと輝く!!」
道南農業

7 上川地域

将来の担い手に選ばれる
輝く上川の農業・農村

8 留萌地域

夢と希望に満ちた
「バラエティ豊かな」留萌農業

9 宗谷地域

“最北”の強みを活かし、
未来を担う人材が活躍する宗谷酪農

10 オホーツク地域

オホーツクの広大な大地で
“クール”に農業

11 十勝地域

日本の食料生産を支え、
地域を豊かにする農業王国十勝

12 釧路・根室地域

わが国の酪農を牽引し続け、次の世代が
夢をもつことのできる農業・農村

